

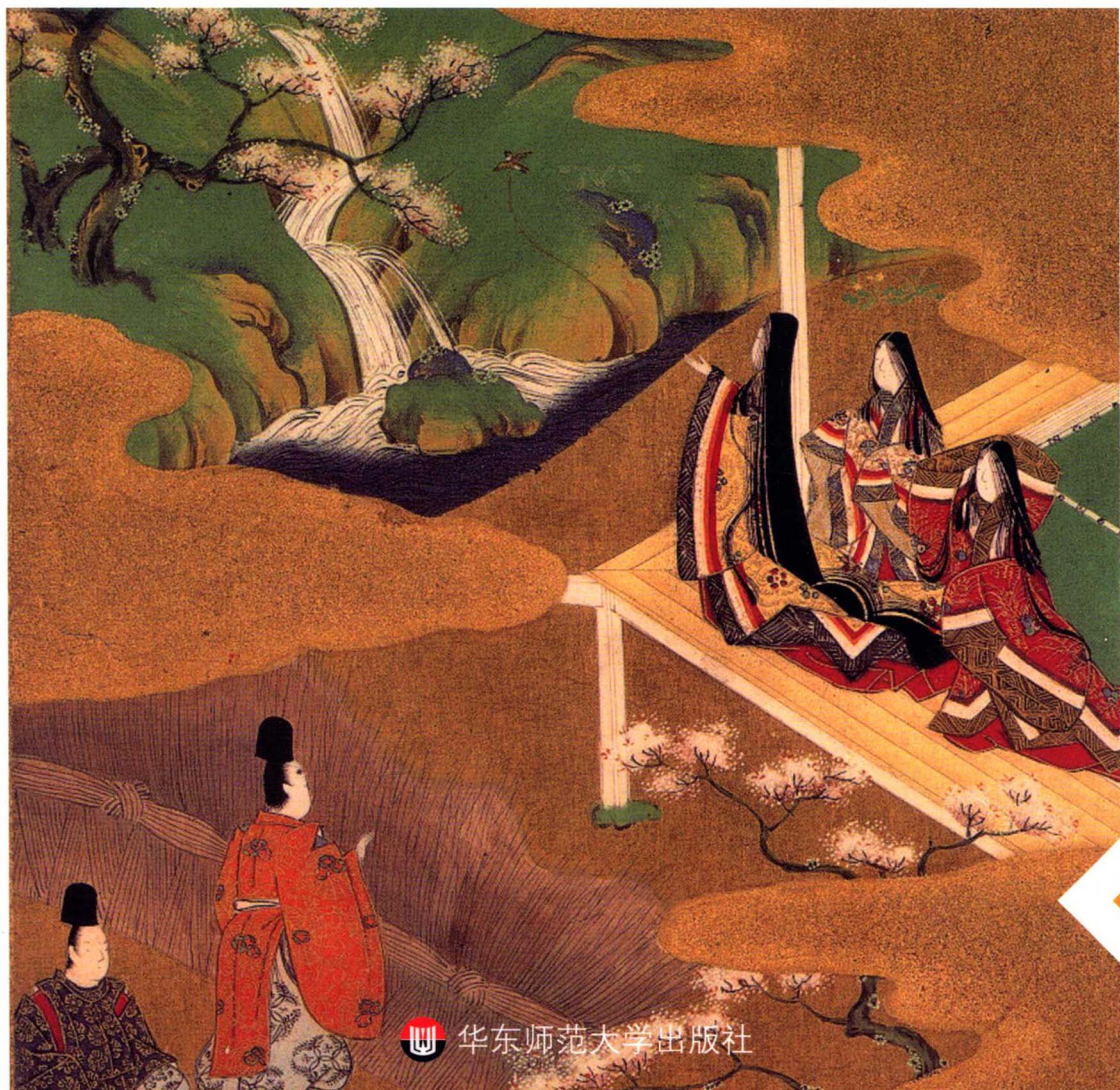
日语专业系列教材

总主编 ■ 皮细庚

新编日语泛读教程

学生用书 第三册

本册主编◎成同社



华东师范大学出版社

总主编 ■ 皮细庚

新编日语泛读教程

学生用书 第三册

本册主编◎ 成同社

副主编◎ 山崎哲永

编著◎ 成同社 陈雪 山崎哲永 大金隆

图书在版编目(CIP)数据

新编日语泛读教程. 第3册/成同社主编. —上海: 华东师范大学出版社, 2013. 4

学生用书

ISBN 978 - 7 - 5675 - 0548 - 3

I. ①新… II. ①成… III. ①日语—阅读教学—教材
IV. ①H369.4

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2013)第 066927 号

新编日语泛读教程 学生用书 第三册

主 编 成同社

责任编辑 孔 凡

装帧设计 卢晓红

出版发行 华东师范大学出版社

社 址 上海市中山北路 3663 号 邮编 200062

网 址 www.ecnupress.com.cn

电 话 021 - 60821666 行政传真 021 - 62572105

客服电话 021 - 62865537 门市(邮购)电话 021 - 62869887

地 址 上海市中山北路 3663 号华东师范大学校内先锋路口

网 店 <http://hdsdcbs.tmall.com>

印 刷 者 苏州工业园区美柯乐制版印务有限公司

开 本 787 × 1092 16 开

印 张 16

字 数 372 千字

版 次 2013 年 8 月第一版

印 次 2013 年 8 月第一次

书 号 ISBN 978 - 7 - 5675 - 0548 - 3/H · 622

定 价 36.00 元

出 版 人 朱杰人

(如发现本版图书有印订质量问题,请寄回本社客服中心调换或电话 021 - 62865537 联系)

编写说明

“新编日语泛读教程”系列教材为日语专业基础阶段泛读课程教材,含学生用书5册、配套教师用书2册,分别供大学本科一、二、三年级学生及同等水平学习者使用。

本书为第三册,供日语专业二年级上学期使用。其余各册为:入门篇(一年级下学期用)、第一册(二年级上学期用)、第二册(二年级下学期用)、第四册(三年级下学期用)。

◎ 本系列教材特色

阅读技巧和策略现今为止,国内日语专业泛读教材中不乏优秀的、富有教益之作,唯有少见传授相关阅读理论的作品。在本系列教材的一~四册中,我们大胆尝试设计编排了阅读技巧和策略的相关学习内容。教材提供全面系统的阅读训练,指导学生掌握猜词、细读、略读、寻读等方法,学会快速、准确地获取并处理信息。

主题选文我们对选文精挑细选。选文富于知识性、趣味性、人文关怀的同时,注重题材视角的多元化和文体的多样性。题材涉及日本的社会、政治、经济、文化、文学、历史、宗教、体育、医药、环保、风土人情、科普知识等各个领域;同时,文体呈多样性,既有文学作品,又有记叙、说明、议论、新闻、广告等语言风格不同的各类文章。其独特设计充分体现了泛读课程自身的特点,更兼顾题材的系统性,旨在开阔学生的视野,增强日语语感,扩大词汇量,培养阅读能力和分析能力。

本系列教材的编写以教育部颁布的《高等学校日语专业教学大纲》对各个级别的阅读量、难度和速度的要求为依据,按难易度编排,学生用书每册15个主题单元。每单元围绕同一个主题设计了一篇主课文(テキスト A)、一篇副课文(テキスト B)和三篇短文阅读训练。

主课文是为课堂教学设计的,副课文供学生在教师指导下巩固训练使用,三篇短文供学生训练阅读速度并对自己的阅读理解能力进行自测。

下面对本系列教材的特点和使用作具体说明:

● テキスト A 阅读前

编者对主课文(テキスト A)的热身环节进行了重点编写。课文前的练习一中的两个问题旨在激活学生在相关话题上已经取得的知识,鼓励学生在这些话题上先发表初步的看法,待学生读完主课文后把自己的知识和看法与文章中所表达的观点相对比,使学生充分认识到视角的多元性。请学生围绕这两个问题展开讨论,并在学完课文后分析和对比作者的视角与自己的视角之间的异同。练习二中选择的几个词都是学生可能不认识的生词,但它们也是对理解课文内容至关重要的词,该题的目的是通过测试学生在句子中猜测词义的能力,引导学生注意并准确地理解这些词,弄清楚与它们相关的概念,以期对主课文的阅读起到引导作用。

● テキスト A

根据难易度和单元主题设计编排。课文长度从入门篇的500字左右逐渐增加到第四册的1800字左右。

● テキスト A 阅读后练习

在主课文之后,对文章的语言难点进行了注释,其中有一些是难以在一般的学习词典上查到的词语;其后是练习题,目的在于检验学生对主课文内容的把握能力,对这些问题的准确解答,就等于掌握了这篇课文的主要内容。

● テキスト B 阅读后练习

副课文(テキスト B)后包括作者的简单信息以及对课文中语言难点和社会文化知识的注释。练习题或要求学生做简略回答,帮助学生理解文章的主要内容、作者的态度或文章的语气,或把课文主题与社会生活及学生的个人经历联系起来,鼓励学生学以致用,用学到的知识和语言讨论现实问题。

● 阅读技巧和策略训练

阅读技巧和策略专栏根据日语教学大纲归纳出最常用的阅读技能和策略。第一册指导学生判断生词词义,熟悉句子结构,了解中心思想。第二册重点培养学生把握文本中心思想的能力。第三册着重阅读速度和逻辑推导方面的训练。第四册进行综合训练,提高学生对文本的批评鉴赏能力。

除了对阅读技能进行概括性讲解之外,每个专栏都给出例子供学生训练并掌握阅读技巧和方法。我们也在主副课文的练习题中设计了涉及技能和方法的题目,让学生把学到的技能及时运用于阅读实践。

阅读方法属于技能强化训练,即同一种阅读技巧要连续在几个单元内反复操练,以使学生能运用自如。我们在学生用书每3个单元设计了一个阅读技巧/策略专栏,单册共有5个专栏。

● 自测阅读训练

每课主副课文后的三篇短文供学生自行测试阅读速度和水平。每篇短文之后的问题都按国际日语能力测试以及日语专业四、八级考试中阅读理解部分的题型设计,既能够起到进一步扩大知识面的作用,又能让学生熟悉国际日语能力测试,日语专业四、八级的题型和难度。学生可自己进行计时阅读训练,在规定时间内完成。

◎ 阅读能力要求

本系列教材每部分的阅读理解练习都同时检验学生把握文章的能力,并根据文章的体裁和题材做出了相应的设计。例如,议论文后所提问的问题侧重于检验学生对文章的主旨、作者的意图、重要细节或论据的理解;叙述文后提问的问题则重点检验学生对主要情节和人物、作者的态度、文章的语气的把握能力。但二者也都包括对文章中语言难点和社会文化知识难点的理解。

本教材为日语学习者精心挑选或经典或具有时代感的日语文章百余篇,篇篇读来爱不释手。在此我们谨代表广大日语专业师生及日语学习爱好者对原作者致以深深的谢意及崇高的敬意。

第三册在总编皮细庚教授的具体指导下,由主编成同社、副主编山崎哲永及编者陈雪、大金隆四人承担。

具体分工如下:

课文选材:山崎哲永、成同社;单词注释:山崎哲永;词语注释:成同社、山崎哲永;语法注释:成同社;テキスト AB 练习:山崎哲永、成同社;テキスト C 练习:大金隆、山崎哲永、成同社;阅读

技巧:陈雪、山崎哲永、成同社;统校全书:成同社。

需要指出的是,教师在课堂上也可以灵活使用本教材,例如,在讲授任何一课时,教师可以根据学时的要求和学生的兴趣把テキスト B 作为课堂上主要讲解的对象,而把テキスト A 留给学生自学使用。

本教材希望对学生提高日语基本功、扩大知识面、培养逻辑思维能力、增强分析能力有所帮助。

虽然我们研读了各种教材及相关理论知识,但我们仍感到能力有限,错漏之处在所难免,欢迎各位专家、教师、广大使用者批评、指正。

编者

2013年6月

目 录

第 1 課

テキスト A 陰翳礼賛 / 1

テキスト B イチョウの落ち葉 / 4

テキスト C

- (1) 魔術の領域 / 6
- (2) 日本の耳 / 9
- (3) 泉に聴く / 12

第 2 課

テキスト A お月見 / 15

テキスト B Orange はオレンジとは限らない / 18

テキスト C

- (1) イギリスと日本 / 20
- (2) 宴会太りで大あわて / 23
- (3) トイレットペーパーの文化誌 / 25

第 3 課

テキスト A 世間体ということ / 28

テキスト B 「甘え」とは何か / 32

テキスト C

- (1) あいづち / 35
- (2) 利用された十七条憲法 / 37
- (3) 先輩と後輩 / 39

阅读技巧专栏 1

辨识事实与观点 / 42

辨识原因与结果 / 43

第 4 課

テキスト A 視線の回避 / 45

テキスト B 沈黙の世界 / 48

テキスト C

(1) 低温研だより / 52

(2) ここに人あり / 54

(3) 田園雑感 / 57

第 5 課

テキスト A 茶道の真意 / 60

テキスト B 江戸の職人 / 63

テキスト C

(1) 見どころ聴きどころ / 66

(2) 扇子 / 69

(3) 表札はどこへ行った? / 71

第 6 課

テキスト A 履物が語る日本人の歩き方 / 75

テキスト B “居る”ことの意味 / 78

テキスト C

(1) 障子の破れに学ぶもの / 81

(2) 裸の付き合いは日本の文化 / 83

(3) いい肉で / 85

阅读技巧专栏 2

阅读细节内容 / 88

主要观点和支持观点 / 93

第7課

テキスト A 私の好きな春の言葉 / 98

テキスト B 柚子 / 100

テキスト C

(1) 季節風と日本人 / 103

(2) 夏秋表 その一 / 105

(3) 「自然」という言葉の歴史 / 107

第8課

テキスト A 場面に依存する言語行動 / 110

テキスト B 男女差がなくなったことばづかい / 113

テキスト C

(1) 単語を見れば内容がわかる / 116

(2) 七五調のリズム / 118

(3) 不特定多数に伝わる「音のことば」 / 120

第9課

テキスト A 働き蜂日本人と長期休暇 / 124

テキスト B ちどりがけ / 127

テキスト C

(1) 社会貢献型企业 / 131

(2) 手も宝 / 134

(3) 就職拒否の息子へ / 136

阅读技巧专栏 3

对比找出相同之处,比较发现不同之处 / 139

第 10 課

テキスト A 朝飯前 / 143

テキスト B 先入観の恐ろしさ / 146

テキスト C

(1) 心を休めたときに頭は動き出す / 150

(2) 有効な目標の立て方 / 152

(3) ろまん燈籠 / 155

第 11 課

テキスト A ごみから地球を考える / 158

テキスト B IT 汚染 / 161

テキスト C

(1) もう少し小さい都市を / 164

(2) 整理学 / 167

(3) 私たちにできること / 170

第 12 課

テキスト A 日本の高等学校教育についての憂い / 173

テキスト B 理科離れの原因 / 176

テキスト C

(1) 管理された聴衆 / 179

(2) 高校生に読書の楽しみを / 181

(3) 他者意識 / 183

阅读技巧专栏 4

支持一个观点 反对一个观点 / 186

第 13 課

テキスト A 3月11日14時46分 地震研では / 189

テキスト B 花を贈る / 192

テキスト C

- (1) 生と死を見つめて / 196
- (2) 空腹の果てに / 199
- (3) 癒される者 / 202

第 14 課

テキスト A 国会のしくみと内閣発足のプロセスを知る / 207

テキスト B 日本人の法と正義 / 210

テキスト C

- (1) 市場経済の機能と限界 / 213
- (2) お守り / 216
- (3) かわいそうなぞう / 218

第 15 課

テキスト A 老後の負担となる子供 / 222

テキスト B 機会の平等 / 225

テキスト C

- (1) ワーキングプア / 228
- (2) やさしさ / 230
- (3) 時の値段 / 232

第1課

考えよう

1. 日本人はなぜ陰翳に美を感じるのか。
2. 日本建築は陰翳をどのように利用しているか。

テキスト A 陰翳礼賛

私は建築のことについては全く門外漢であるが、西洋の寺院のゴシック建築というものは屋根が高く高く尖って、その先が天に沖せんとしているところに美観が存するのだという。これに反して、われわれの国の伽藍では建物の上にまず大きな薨を伏せて、その庇が作り出す深い広い陰の中へ全体の構造を取り込んでしまう。寺院のみならず、宮殿でも、庶民の住宅でも、外から見て最も目立つものは、ある場合には瓦葺き、ある場合には茅葺きの大きな屋根と、その庇の下にただよう濃い闇である。時とすると、白昼といえども軒から下には洞穴のような闇が繞っていて戸口も扉も壁も柱もほとんど見えないことすらある。これは知恩院や本願寺のような宏大な建築でも、草深い田舎の百姓家でも同様であって、昔の大概な建物が軒から下と軒から上の屋根の部分とを比べると、少なくとも目で見たところでは、屋根の方が重く、堆く、面積が大きく感ぜられる。さようにわれわれが住居を営むには、何よりも屋根という傘を拡げて大地に一郭の日陰を落とし、その薄暗い陰翳の中に家造りをする。もちろん西洋の家屋にも屋根がないわけではないが、それは日光を遮蔽するよりも雨露をしのぐための方が主であって、陰はなるべく作らないようにし、少しでも多く内部を明りに曝すようにしているこ

5

10

とは、外形を見ても顔かれる。日本の屋根を傘とすれば、西洋のそれは帽子でしかない。しかも鳥打帽子のように出来るだけ鏝を小さくし、日光の直射を近々と軒端に受ける。けだし日本家の屋根の庇が長いのは、気候風土や、建築材料や、その他いろいろの関係があるのであろう。たとえば煉瓦やガラスやセメントのようなものを使わないところから、横なぐりの風雨を防ぐためには庇を深くする必要があったであろうし、日本人として暗い部屋よりは明るい部屋を便利としたに違いないが、是非なくあなつたのもあろう。が、美というものは常に生活の実際から発達するもので、暗い部屋に住むことを余儀なくされたわれわれの先祖は、いつしか陰翳のうちに美を発見し、やがては美の目的に添うように陰翳を利用するに至った。事実、日本座敷の美は全く陰翳の濃淡によって生まれているので、それ以外に何もない。西洋人が日本座敷を見てその簡素なのに驚き、ただ灰色の壁があるばかりで何の装飾もないという風に感じるのは、彼等としてはいかさまもつともであるけれども、それは陰翳の謎を解しないからである。われわれは、それでなくても太陽の光線の入りにくい座敷の外側へ、土庇を出したり縁側を付れたりして一層日光を遠のける。そして室内へは、庭からの反射が障子を透してほの明るく忍び込むようにする。われわれの座敷の美の要素は、この間接の鈍い光線に外ならない。われわれは、この力のない、わびしい、はかない光線が、しんみり落ちて座敷の壁へ沁み込むように、わざと調子の弱い色の砂壁を塗る。土蔵とか、厨とか、廊下のような所へ塗るには照りをつけるが、座敷の壁はほとんど砂壁で、めったに光らせない。もし光らせたなら、その乏しい光線の、柔かい弱い味が消える。われらはどこまでも、見るからにおぼつかなげな外光が、黄昏色の壁の面に取り着いて辛くも余命を保っている、あの繊細な明るさを楽しむ。われらにとってはこの壁の上の明るさあるいはほの暗さが何物の装飾にも優るのであり、しみじみと見飽きがしないのである。さればそれらの砂壁がその明るさを乱さないようにとただひと色の無地に塗ってあるのも当然であって、座敷ごとに少しずつ地色は違うけれども、なんとその違いの微かであることよ。それは色の違いというよりもほんのわずかな濃淡の差異、見る人の気分の相違というほどのものでしかない。しかもその壁の色のほのかな違いによって、また幾らかずつおのおのの部屋の陰翳が異なつた色調を帯びるのである。

[谷崎潤一郎 『陰翳礼賛』 筑摩書房 1956(表記一部改)]

単語

甍(いらか)	[名]	瓦葺きの屋根。屋根の背。
堆い(うずたかい)	[形]	積み重なって高く盛り上がっている様子。
鳥打帽子(とりうちぼうし)	[名]	前に庇のついた平らな帽子。
鏝(つば)	[名]	帽子の回り、または前の部分に庇のように出ている部分。
けだし	[副]	まず間違いなく。
土庇(つちびさし・どびさし)	[名]	数寄屋風書院や茶室などで、地面に柱を立て、深く差しかけた庇の部分がとても長く突き出している。

- 縁側(えんがわ) [名] 家の建物の最も外側に張り出して設けられた板敷き状の通路で、屋内と屋外の中間の性質を持つ場所。
- 辛くも(からくも) [副] やつとのこと。どうにか。

解説・語彙

天に冲せんとしている

“天に冲せんとしている”的意思是“天に高く上がろうとしている”。其中“冲せ”是“冲する(サ变动词)”的未然形。“ん(む)”是文语助动词,一般前接动词未然形,类似于现代日语中的“う・よう”。

解説・文法

ごとに

前接名词,表示后述情况、状态按一定频率反复发生,无有例外。相当于中文的“每……”、“均……”等。

練習問題

問1 文中の「大きな薨……取り込んでしまう(3行目)」の表す形は次のどれか。



a



b



c



d

問2 文中に「是非なくああった(19行目)」とあるが、その理由にならないものはどれか。

- 煉瓦やセメントがなかったため、庇を深くする必要があったから。
- 横なぐりの風雨を防ぐために、庇を深くする必要があったから。
- 日本人は元来暗い部屋を好むので、庇を深くする必要があったから。
- 日本建築の材料は雨風に弱いので、庇を深くする必要があったから。

問3 文中に「陰翳の謎を解しない(24行目)」とあるが、誰が何を理解していないのか。40字程度で説明しなさい。

問4 本文の内容と一致するものはどれか。

- 日本人は暗い部屋が好きなので、庇を長くして暗い部屋を作った。
- 日本建築は部屋に光りが届きにくいので陰翳の美しさが利用できた。
- 日本建築は壁を明るく塗って部屋を光りで満たすようにできている。
- 日本人は明るい部屋を好むため庇を短くして明るい部屋を作った。

問5 この文章は内容から3つの段落に分けられる。3段落目の始めは「われわれは、それでなくとも」である。2段落目の始めは次のどれが最もふさわしいか。

- a. 「寺院のみならず」
b. 「さように我々が住居を営むには」
c. 「けだし日本の家屋が」
d. 「が、美というものは」

テキストB イチョウの落ち葉

紅葉したイチョウの葉っぱは美しい。落ち葉を掃くのは、もったいない。

落葉した黄金色のじゅうたんを歩けば、足元でカサ、カシャという小さな乾いた音がする。ふんわりした柔らかい感触も伝わってきて、小さい頃の温もりを思い出す。

5 銀杏を見上げると黄色の世界が拡がり、落ち葉の黄色と響きあって、辺りが一層輝いて見える。それに、葉っぱがひらひら落ちてくる様は、秋の最高の風情である。

葉っぱがすっかり落ちてしまえば、いよいよ冬がやってくる。骨だらけになった木々はまた美しく、勝手放題に伸びた幹や枝の形には、生きざまと人生(木生?)を感じ、感慨深い。

10 こういう体験をし、感動することは、季節感が無くなった今日こそ、特に必要である。だからといって、紅葉狩りに車を使って「遠乗りしなさい」ということではない。身近な暮らしの中で、ちょっと気をつければできることが沢山ある。

例えば、お寺やお宮、公園や学校などで、紅葉や銀杏が落葉する時、毎日そこを掃かないで、しばらく掃除をやめさせたら、どうだろうか。

15 木の下に落ち葉が無いのは、《光が当たるのに陰影が無い木》と同じで、とても不自然である。絵に描いて見ると、それがよくわかる。

落ち葉は醜いゴミではない。すぐにゴミと思う習性や感性がおかしいと思う。確かに掃き集めてしまったら、ゴミに一変する。毎日掃かないと、気持がおさまらない人もいるが、危険でない限り、せめて二、三日おきにしたらどうだろう。

20 私が勤務した中学、高校で、秋の紅葉時、初めは多勢に無勢だったが、美術教師として《落ち葉を掃かせない教育》を続けた。

ところが、後日こういう教育を率先し、実践された小学校長の存在を知って驚いた。その方は、美術教育の先輩の故・木村力先生。

話はこうである。

25 「私の学校の校庭に銀杏の木があります。秋、黄色くなった葉っぱが落ちる頃、しば

らくそこの掃除をやめさせています。校庭の落葉も美しいし、そこで遊び回る子供たちの情景が、とっても美しいのです。そういう自然の移り変わる美しさを、そっと子供たちに体験させ、送りとどけてやりたいのです」

この話を聞いて、とても感動した。芯から嬉しかった。大袈裟に言えば、同じ考えの人が居られたという連帯感だった。

こんな学校で育つ子供たちは、本当に幸せである。木村校長先生は、子供たちの心を大切に育てながら、能力を高めて行く地道な教育実践家だった。どこの職場でも、管理面だけが重視、優先されてくると、職員の心と仕事まで四角四面になってしまう。やはり、上に立つ人の豊かな感性と心、思い切って実行する勇断、信念が何よりも必要である。

たまたまこの話を、月一回担当していた朝のNHKラジオ(昭和六十三年十一月十一日《私の発言》)で放送したら、直ぐにかなりの反響があった。

その一つに、私の放送を聞いた友人の県庁マンから

「この秋から、県庁前庭の銀杏並木の落ち葉を掃かないようになった」という電話があった。翌秋からは《県庁・銀杏並木コンサート》が始まり、今ではマスコミ報道の年中行事の一つとなって、多くの県民に喜ばれるようになった。今、まさに心の時代、感性の時代である。

さて、紅葉の一番美しい季節になったら、皆さん、落ち葉を目の敵にしないで、落ち葉を友とし、深まる秋を十二分に楽しもうではありませんか。

[坂田燦 『この道や』 城野印刷所 2000]

単語

温もり(ぬくもり)	[名]	心に感じられる暖かみ。
遠乗り(とおのり)	[名・自サ]	馬や車などに乗って、遠方へ出かけること。
おさまる	[自五]	しずまる。
芯(しん)	[名]	こころの奥底。
四角四面(しかくしめん)	[名]	堅苦しく、融通の利かないこと。

解説・語彙

多勢に無勢

“多勢に無勢”的意思是“少数人对多数人(难以取胜)”,可酌情译为“寡不敌众”等。